

[022] 教育基礎学研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7344030>

出版情報：教育基礎学研究. 22, 2025-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



感謝の言葉

野々村先生、これまで本当に、本当にお世話になりました。大学に行けばいつもいてくれる、そんな気がしていました。それゆえに、野々村先生が九州大学を出られるというのは今でも実感が伴うことのない不思議な感覚であり続けています。

思えば、研究に行き詰まった時、ふとした疑問が湧いた時、何かとても面白い発見をした時、誰もが野々村先生のところを訪ねては心ゆくまでお話をさせて頂いてきました。そうした何気ないやりとりのなかで、私たちは野々村先生の存在の大きさに救われ、励まされ、導かれてきました。何より、いまはもう失われつつある大学人としての振る舞いを野々村先生に重ねて見てきたように思います。一挙手一投足から、本当に多くのことを学ばせて頂きました。

野々村先生は近代以前および初期近代のイギリスにおける子どもの養育を巡る多様な知と実践の交差に細やかなまなざしを向けてこられました。子どもと家族と医学的知がプリズムのように絡み合う子ども史の壮大な研究プロジェクトでは、多くのOBOGが関わり、子どもと家族を巡る「科学」と「知」と「統治」の布置を問われています。野々村先生の研究や指導のなかに登場する思想家たちの多彩さもまた、私たち皆の知的関心を喚起し続けています。フーコー、パトラー、アガンベン、阿部謹也、ドンズロ、ラトゥールなど様々な思想家たちがゼミや研究会や雑談のなかで参照されてきました。すべてにおいて、研究の喜びに誘って頂く日々でした。

この間、大学キャンパスは混沌と霊気とホコリ臭さ漂う箱崎から、無機質さと秩序溢れる伊都へと移りましたが、野々村研究室と教育史・教育哲学合同演習室の周辺は相変わらず箱崎の空気を纏っています。空間は物理的に存在しているというよりも、人とモノと言説が滞留することで開かれるものであるのだとすれば、合同演習室周辺は連綿と繋がってきた知の絡み合いの中を私たちが行き交い生まれてきた学問の場であるのだと思います。この場を、そして移りゆく大学を、何よりも色彩に満ちた学問の場として維持できたのは野々村先生の存在あればこそでした。カツカツと音を立てながら足早に書籍を取りに行く姿、演習室で皆で横並びに座って史料を覗む姿、学生達に溶け込んで楽しそうに話し込んでいる姿、そして史資料の魔窟となった研究室に籠もる姿は、大学人のあり方そのものとして私たちの眼に刻まれています。野々村先生は決して大きくはないその身体の全体で研究することの喜びを体現され、時代に流されがちな大学という学問の砦を護ろうとされてきました。その後ろ姿を傍らで見させて頂き、ともに闘うことができていたとしたら、これ以上の喜びはありません。

箱崎の教育棟玄関の桜の木の下で発足したという「教育基礎学研究会」は今年で22年を迎えました。創立メンバーとして関わってこられた野々村先生は、土戸敏彦先生・新谷恭明先生・木村政伸先生と同じく、異動をもって永久会員として登録されることになります。今後も、今までと変わらず、私たちを温かく見守って頂けたらと思います。

令和7年3月

藤田雄飛・江口潔・鈴木篤・佐喜本愛